慶應義塾 医学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話（3353）1211　内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　比企　能樹
毎月　1回20日発行

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●診療時間＝午前9時～午前11時
●電話＝（3353）1211（大代表）

東北地方太平洋沖地震
「慶應義塾救援医療団」を派遣

震災発生直後に結成　被災地での医療にあたる

3月11日午後2時46分頃、国内観測史上最大となるマグニチュード9・0を記録する地震が東北地方太平洋沖で発生しました。巨大な津波や火災による死者・不明者の合計は2万人を超えるといわれ、福島第一原発事故を受けて避難している人を含めた25万人以上が避難所での生活を余儀なくされています。

こういった事態を受け、慶應義塾では「慶應義塾救援医療団」を組織することが速やかに決定。医学部・病院でもボランティアを募る旨を連絡したところ、その日のうちに40人以上が協力を申し出て、直接被災地での医療活動に従事するだけでなく、医療物資の獲得などに向けて各自が支援活動をスタートしました。

救援医療団は、公的機関からの要請に対応して現地に赴く救援医療チーム（救急医学教室の堀進悟教授が指揮をとる）と、被災地の慢性期患者に対する様々なケアを実施する一般医療チーム（眼科学教室の坪田一男教授が指揮）の2チーム体制で組織。第一陣となる救援医療チームは、東京都の要請に基づき、3月17日（木）朝、宮城県気仙沼市に向かって出発しました。救援医療にあたっては放射線専門家が検出器を持参し、GPS通信機も活用します。

3月24日（木）に岩手県宮古市に向けて出発した一般医療チームは、大学病院連携高度医療人養成推進事業のパートナーである岩手医科大学をサポート。今後長期間にわたると見られる慢性疾患を持つ被災者の皆さんの治療をサポートしていきます。

また、三四会でも医学部の要請を受け、支援部隊派遣のために300万円の支出を行いました。この支出に関しては、会長以下3名の副会長、財務担当理事、各理事の賛同を得て決定しました。

今後は義塾としての様々な支援活動に加え、被災地の三四会員の医療サポートなども独自に行っていきます。

津波の傷跡が深く残る陸前高田（一般医療チームが撮影）

医療団結成オリエンテーションに集まった有志の一部

【医学部長より】慶應義塾救援医療団結成にあたって

慶應義塾救援医療団が結成され、東京都からの要請に応えて3月17日早朝に藤島清太郎君（救急医学61回）を隊長とする第一陣が気仙沼の救援医療任務で派遣されました。

今回の災害は国難規模であり、極めて甚大且つ広範に亘っていることに鑑み、医学医療の支援だけでなく輸送手段、物資供給、政財界のネットワークを活かした多面的支援体制を構築する必要がありました。

今回、清家篤塾長をはじめとして塾法人の迅速かつ深いご理解もあり、「義塾としての救援医療団」としての立ち上げをお認めいただいたおかげで、実に多くの医師、看護師、薬剤師の皆さんが応募にいち早く応えていただき、信濃町キャンパスの士気は益々高まっております。急性期の対応だけでなく、すでに法医学教室の藤田教授による犠牲者の身元確認作業への貢献、大学病院連携型高度医療人養成推進事業の連携校である岩手医科大学およびその周辺地域への派遣活動（眼科学教室　坪田教授）、高度先進医療大学病院への支援活動としての東北大学医学部付属病院への物資調達活動（生理学教室　岡野教授）などが稼働しました。これらの活動に当たってはすでに多くの評議員、理事の方々の将に社中一丸のご支援がありましたこと深謝申し上げます。

3月24日には第一陣の帰京報告会が総合医科学研究棟ラウンジで開催され、100名を超す大勢の方々の参加に加え、服部禮次郎連合三田会会長がご臨席され、4名の第一次隊員への表彰を行うことができました。

一連の救援活動に対して、比企三四会長、末岡理事からもいち早くご賛同とご支援をいただきました。この場を借りて三四会会員の皆様に厚く御礼申し上げます。

今後は亜急性、慢性期支援活動を「地元のニーズに合わせて息長く」を合言葉に活動を進めていきたいと考えております。皆さまのご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。

（末松　誠　医化62回）

緊急現地レポート

救急医学教室堀進悟教授、眼科学教室坪田一男教授による関連記事は5面に掲載

救援医療チーム　宮城県気仙沼市に派遣

気仙沼市浦島地区の鶴ヶ浦生活文化センターにて

同センターに仮設診療所を開き診療を行った

一般医療チーム　岩手県宮古市に派遣

陸前高田地区における医療の中心的役割を果たす米崎コミュニティセンター

岩手医科大学チームと連携して情報収集を行った

第105回医師国家試験
慶應医学部新卒合格率99%　新卒合格率全国3位と名誉挽回！

平成23年2月12～14日に実施された第105回医師国家試験の合格者が、3月18日、厚生労働省より発表された。東北関東大震災の影響を受け延期されるのではと懸念された中、予定通りの発表となった。

第105回医師国家試験の受験者総数は8611名、合格者は7686名（89・3％）と結果的には昨年（89・2％）と変化がみられなかった。男女別合格数は男5187名、女2499名と、合格者のうち32・5％を女性が占めた。合格基準は一般問題127点以上（197点満点）、臨床問題368点以上（588満点）、必修問題160点以上（200点満点）、禁忌肢問題選択数3問以下とおよそ昨年並みであった。

第102回から第103回にかけては新ガイドライン適用のほか、新形式問題の出題、出題順序の変更など大幅な変更があったが、第104回から今回への変更は小幅な変更にとどまった。主な変更点としては、第103回から新規導入された医学英語問題と計算問題がそれぞれ1題ずつへと減少し、逆に一般教養問題が復活した点である。また、病態生理に基づいた絶対的知識量の増加、臨床実習の重視などの傾向がみられ、医師として臨床を行う前の関門として着実に進化している、あるいは進化しようとしている様子が伺えた。

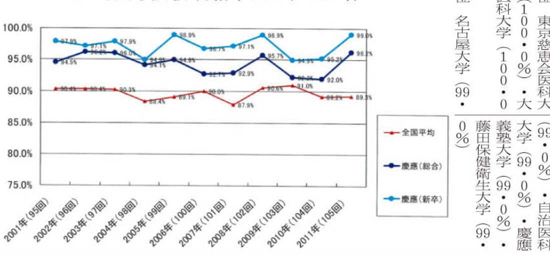
本塾医学部では総計105名が受験し101名が合格（96・2％）、うち新卒は97名が受験し、96名が合格（99・0％）した。新卒合格率99・0％は全国3位の成績であり、ここ数年低迷していた不名誉な合格率を挽回する結果となった。本学では第103回・第104回と2回連続して新卒の不合格者を5名ずつだしており、学生・教員の間で学力低下を心配する声が囁かれてきた。90回生（現6年）国試対策委員会では、例年以上に医師国家試験への対策に力を入れてきた。4月より前年と国家試験の結果・傾向を交えての説明会を行い、模試などを積極的に利用しての計画的な学習を促してきた成果といえる。東北関東大震災の影響で暗いニュースが続くが、今回の高い医師国家試験合格率は本学にとって久々に明るい知らせとなった。

周囲からの重圧にも関わらず無事関門を通過し、4月より医師となる101名の医師の卵に敬意を表し、本学の名に相応しい活躍を期待したい。

（4年　松本紘太郎）

参考（新卒合格率順位）：1位　東京慈恵会医科大学（100・0％）・大阪医科大学（100・0％）　3位　名古屋大学（99・0％）・滋賀医科大学（99・0％）・自治医科大学（99・0％）・慶應義塾大学（99・0％）・藤田保健衛生大学（99・0％）

医師国家試験 合格率（2001年～2011年）



平成22年度卒業式・学位授与式
卒業式は動画配信となったが　97名は明るい未来に向けて旅立つ

平成22年度医学部学位授与式が3月24日、北里講堂で執り行われた。学位授与式は、去る3月11日に発生した「東北関東大震災」の被害の甚大さを受けて卒業式と共に中止の予定となっていたが、学位授与式だけでもさせてあげたいという末松誠医学部長の配慮により実現した。

学位授与式にて。末松医学部長の後ろには涙ぐむ安井さん

インターネットで動画配信された卒業式

学位授与式は医学部卒業生97名と教職員数名のみで執り行われた。式典は午前10時定刻に開始され、震災によって亡くなられた方に対する黙祷から始められた。

末松医学部長は訓辞として、勉学に励み体育会にとっても黄金の6年間の原動力となった90回生がいかに素晴らしい学年であったかを述べた後、この先の人生を医師として歩む全員に対してエールを送った。これまでは声をかけられる立場だった君たちだが今後は君たち自身が科学に根付いたエビデンスに基づく温かい言葉を患者さんにかけることが求められるとした上で、君らなら一生その仕事を楽しみ励んでいけるだろうとした。震災は大きな打撃であり人々の苦しみと戦いは始まったばかりであるが、震災の起きた3月11日を共通の再起の日として心に刻み、自然の僕となることなく病と対峙する医師の使命を全うすべく一身独立、一国独立の精神をもって医学医療の質を高め国益の向上を目指すことを誓い締めくくった。

また、教職員代表として武田純三病院長からは震災によって卒業式を行えなかった90回生に対して、自身も学生紛争の真っただ中であったために卒業式を経験していないことを話した。そして、初心を忘るべからずという教訓と共に、90回生が白衣式で誓った言葉を読み上げ「患者さんにとって最善の医療を行うこと」の意味を改めて考えさせた。そして最後に、チームリーダーとなるべき立場であることをしっかりと自覚して歩んで欲しいと付け加えた。

そして、比企能樹三四会会長は学位授与式を開けたことを嬉しく思うと述べた後、卒業生全員に福澤諭吉著『文明論の概略』を贈呈した。

訓辞の後、式は末松医学部長より卒業生全員への学位記授与、武田病院長より首席の遠藤由理佳さんの表彰へと進んだ。

学位記授与では学生課からのサプライズとして、全キャンパスで初めて、学位記と併せて成績表および順位表が授与された。その後、式は90回生の手に渡され、6年間を振り返るスライドショーを見ながら思い出にふけった。

学位授与式の前日には、中止となった大学学部卒業式の開催に代わり、インターネットによる動画配信による式典が行われた。動画配信は午前11時から開始された。

なお、本年度の卒業生は全学部で6413名、うち医学部は97名であった。

式典は開式の辞に始まり、まず長谷山彰常任理事による学事報告があり、各学部の卒業生数および表彰者数が報告された。次いで、各学部の代表者への学位記授与式が行われた。続いて各種表彰が行われ、医学部からは首席として遠藤由理佳さんが表彰を受けた。次に小泉体育努力賞として、医学部水泳部4名、医学部競走部11名、医学部ゴルフ部10名が表彰された。最後に、小泉体育奨励賞や塾長奨励賞の表彰が行われた。

各種表彰の終了後、清家篤塾長が式辞を述べた。塾長は、卒業生の新たな門出を祝うとともに、未曾有の地震津波災害となった「東北関東大震災」の犠牲となられた方々への哀悼の意を表した。さらに、この大災害を乗り越えるために必要な人の力として「知力」、「徳の力」「正しい判断力」が不可欠であると続けた。そして本塾の卒業生はこの3つの力を以って、現在困難に直面している日本を力強く復活させ、さらにその先の発展に貢献してくれるものと信じると結んだ。

次いで、トヨタ自動車株式会社の渡辺捷昭代表取締役副会長が塾員代表として祝辞を述べた。続いて、経済学部の梅本周平君が在学生代表として送辞を送った後、これに対して環境情報学部の平賀俊孝君が卒業生代表答辞を返した。

式典の最後は塾歌斉唱で締めくくられ、引き続き2011年三田会結成式が行われた。

（4年　平本和音　松本紘太郎）

慶應義塾による「義援金」へのご協力のお願い

かつて福澤諭吉は、数度の大災害に際し義援金を募るなど、被災地の支援に尽力しました。

今回の震災にあたり、慶應義塾、慶應連合三田会、塾生代表機関の大学全塾協議会は、義塾社中として一致協力し、また趣旨にご賛同いただけるすべての皆様のご協力を得て、被災者の方々への最大限の支援を行うため、「東北地方太平洋沖地震義援金」を募ることといたしました。

寄せられましたご厚志の義援金は、日本赤十字社に寄付することといたしますが、被災地の医療支援のためにも使用させていただきます。

義援金受け入れ口座

口座名：『慶應義塾東北地方太平洋沖地震義援金』（ケイオウギジュクトウホクチホウタイヘイヨウオキジシンギエンキン）

三井住友銀行　三田通支店
普通預金・口座番号　8243412

◎三四会員の皆さまが振り込まれる際には、振込氏名の後に「氏名○○三四会」としてください

お問い合わせ先：慶應義塾基金室
〒108-8345　東京都港区三田2-15-45
電話　03-5427-1542　FAX　03-5427-1546
kikin-box@adst.keio.ac.jp

＊募集期間は、3月17日から7月末までとさせていただきます。
＊収支につきましては「三田評論」、「三田ジャーナル」、義塾および慶應連合三田会の各ホームページ等に公表してまいります。
＊寄付金控除をご希望の方は、お手数でも慶應義塾基金室まで『お名前（漢字・カナ）・ご住所・電話番号・振込日・金額』をご連絡下さいますようお願い申し上げます。

三四会より　被災地の皆さまにお見舞い申し上げます

未曾有の大災害を受けられた慶應義塾・三四会関係の皆様およびご家族の方々に、心よりお見舞いを申し上げます。

三四会といたしまして、本塾・医学部・病院と連携の上、できる限りの支援を致すべく三四会支部長とも連絡をとりながら行動を開始いたしております。

被災地の皆様と日本全土の安全回復を、衷心より祈念致します。

三四会　会長　比企能樹

鑑往知来

年明けは、大学入試が最盛期に当たり、新参者の私には学内が何となく忙しなく感じる。AO入試、推薦入試に始まり、全学部統一、一般A日程、B日程、C日程まで何回も入試が繰り返されるからである。学生側の入学したい要求と大学側の学生を確保したい思惑が一致した結果である。この時期、両者にとって大学本来の意味など関心の中心ではないようだ。「大学という居心地のよい部屋に先ずは入りましょう。その後は卒業までにゆっくり考えましょう」と受験生を誘っているようである。入学後のカリキュラムポリシィをみても大学で教えることかと考えさせられる課題が多い。

「遅刻をしない、時間を厳守する、さらには四則演算をマスターさせる」とか、大学以前に既に教育された事がらが議論される。明らかな学力低下、いやそれ以前の問題である。日本の大学が何故これほど変化（後退）したのか、大学卒業後42年のブランクがあると合点のいく説明を引き出せない。これでは卒業後社会人として通用するか疑わしい。今話題の就職難もこの辺に原因があるかもしれない。企業の就職担当者が日本人の学生より外国人のほうが社会人としてしっかりしていると評価しているという話を聞くと暗澹たる気持ちになってしまう。しかし、医学部のように卒業後に国家試験を控えている学部では、このようなぬるま湯に漬かりっ放しの学生は存在できないから、あまり心配する必要はないであろう。彼らの特徴は人の所為にすることに長けていることである。

これをさせないのが国家試験なのであろう。医師側からみるとむしろ彼らが年を取り患者の立場でわれわれの前にあらわれることかもしれない。近年多く見られる教師を批判してやまない親を作った教育は病気になれば医師を批判してやまない患者をつくる可能性はおおきいであろう。

この意味では、大学教育はあながちわれわれ医師グループと無縁ではないであろう。

（目白大学保健医療学部理学療法学科　特命学長補佐・教授　牛島　康栄　48回）